

外交官漢詩人 堀口九萬一の詩作年譜

西村 富美子

大正十年(1921)に復刊された雑誌『明星』の第六卷第三号(大正十四年三月刊1923)に、すでに前稿で挙げたように次のような漢詩三首が見える。

癸亥晚秋與羅馬尼駐劄公使堀口父子飲、長城有詩、次其韻却酬、
三首

癸亥晚秋、羅馬尼駐劄公使の堀口父子と飲む。長城に詩有り、其の韻に次し却酬す。三首

| | |
|---------|-------------------|
| 官場迨暇共吟筵 | 官場 暇に迨んで 吟筵を共にす |
| 公使風流誰比肩 | 公使の風流 誰か肩を比べん |
| 更喜君家公子在 | 更に喜ばしきは君が家に公子の在りて |
| 龍蛇百變作長篇 | 龍蛇 百變して 長篇を作すを |

〔自注：長城の長子の大学、国詩を善くす、長篇縦横にして、夙に盛名有り。〕

| | |
|---------|------------------|
| 新歡如醋舊歡醇 | 新歡は醋の如く 旧歡は醇し |
| 昨是今非五十春 | 昨は是にして今は非なり 五十の春 |
| 遊俠誰憐漢陽客 | 遊俠 誰か憐れむ 漢陽の客 |
| 如今斑白講書人 | 如今 斑白 講書の人の |

〔自注：予長城と始めて朝鮮の京城に于いて相識る、実に三十年前の事に属す。〕

| | |
|---------|-----------------|
| 偶會故人尋舊歡 | 偶たま故人に会いて 旧歡を尋む |
| 災餘秋夕倍新寒 | 災余の秋夕 新寒倍す |
| 陶然且假醉中夢 | 陶然とし且つ醉中の夢を仮りて |
| 欲學圖南萬里搏 | 図南万里を搏つを學ばんと欲す |

この次韻の詩の作者は『明星』の主筆者、与謝野鉄幹であり、贈詩の相手は羅馬尼(ルーミアニア)公使の堀口九萬一(号は長城)である。詩題によれば「癸亥晚秋」とあるので、大正十二年(1923)の十一月ごろ、関東大震災の二ヶ月ぐらい後であろうか。また「堀口父子」とあるので、子息の堀口大学もこの酒の席に同席していた。すでに大学は十七歳のころに新詩社に入門しており、鉄幹・晶子夫妻とは師弟関係にあった。この詩は大学の父長城が贈った詩に対して、鉄幹が「次韻」の詩を却酬したものである。(鉄幹：五十歳、九萬一：五十八歳、大学：三十二歳)

七言絶句の第一首は、公務の忙中に閑暇を見つけ訪れた九萬一と漢詩を詠む、ルーミアニア公使のこの風流ぶりに肩を並べる者など無く、

子息は長篇の詩を自在に作り、すでに有名な詩人、と父子への讃辞から始まる。第二首は、互いに血氣盛んだった三十年前の事件に及び、今や白髪まじりの年齢だと回顧し、第三首は今日偶然旧友に会って旧交を暖め、酒の酔夢の勢いで、自分は莊子のいう凶南の大計画をしてみたいとの意である。第二句の「災余」は関東大震災後のことを指しているのだろう。

鉄幹がこの三首連作の詩を贈った堀口九萬一は外交官であり、当時ルーマニア公使であったが公務を終えて一時帰国中の身で、息子とともに与謝野鉄幹を訪ねたのであった。この堀口九萬一と鉄幹は特別な因縁のある間柄であった。三十年近い昔のことであるが、韓国の閔妃暗殺事件に関わりがある。なお九萬一は、二十九歳の時に第一回の外交官領事官試験に合格した日本で最初の外交官である。最初の赴任先は朝鮮の仁川であったが、赴任の翌年に妻が死に彼自身も閔妃暗殺事件の首謀者として逮捕され、広島監獄に収監の身となったが、鉄幹も共犯者の疑いをかけられともに広島に強制送還されるといふ大事件が起きたのであった。鉄幹の容疑ははれたが、九萬一は停職処分となり以後の外交官人生に大きな汚点を残してしまった。最初の出発点からつまづいてしまったため折角日本初の外交官であったのに、その外交官の将来は輝かしい栄光に満ちたものではなくかなりきびしい前途が待ち受けていた。

だが公的には恵まれなかったが私的な面ではまじめ一筋の努力型だったので多くの文化活動をし、数多くの著書を残している。また堀口九萬一は漢詩を作るのに熱心で、子息の大学の言によれば「整然とした稿本『長城詩稿』全三巻に、三百三十首の巻詩を残しておかれたが、…」という。^{注①}

元の三百三十首を収める『長城詩稿』は目にする機会をまだ得ていないが、九十九首を収録する『長城詩抄』は閲読する機会があり外交官ゆえのユニークな発想と内容に驚きの念を禁じ得なかった。ただそ

外交官漢詩人 堀口九萬一の詩作年譜

の生涯の特殊さゆえに、彼について知る人は限られているようできわめて少ない。また作られた漢詩も今ではそれほど容易に目にすることはできなくなっている。

筆者は、与謝野鉄幹と関わりのある人物として初めてその名を知ったのだが、漢詩人としての力量をさらに知りたいと考え数年前から資料を集め始めて今もなお続行中である。堀口九萬一の人生と人間像解明を目的に作品読解を始める前に、その一端を整理してみようと考えたのがこの稿のきっかけである。

先にふれた『長城詩抄』をもとにして、他の傍証的な資料と比較検討し、九萬一の漢詩の作品を紹介するために、今回は詩の内容ではなく現段階での詩作年譜をまとめてみた。

まず最初に、参考とした資料を挙げておく。

- 一 『長城詩抄』堀口九萬一著 堀口大学譯 大門出版 昭和五十年三月三日発行。
- 二 「花月」(雑誌) 永井荷風編 世界文庫 大正七年五月〜十二月。
- 三 隨筆集『游心録』 堀口九萬一著 東京第一書房 昭和五年二月二十日発行。
- 四 隨筆集『外交と文藝』 堀口九萬一著 東京第一書房 昭和九年七月十日発行
- 五 『堀口大学全集』6 (随想) 小澤書店 昭和五十七年八月二十日発行
- 六 第二次『明星』第六卷・第三号 (大正十四年三月号)

^{注①}『長城詩抄』のあとがき。大学は、三百三十首から九十九首を選んで『長城詩抄』一冊にまとめた。

【堀口九萬一・詩作年譜】

一 『長城詩抄』による（九九首）

◎明治二十八年（一八九五）

・明治二十八年十月韓國之變、獲韻、繫於廣嶋、獄中之作、記感也。五首

韓国 一〇五

②

◎明治三十三年（一九九〇）

・南米使館漫吟

ブラジル 六

六

③

◎明治三十六年（一九〇三）

・南米雜吟 二首（明治三十六年）

ブラジル 七・八

七・八

⑦

・梨浦竹枝 三首

ブラジル 九〇一

九〇一

②

・漫吟

ブラジル 一二

一二

②

・伯國記事詩 四首

ブラジル 一三〇一六

一三〇一六

②

◎明治三十九年（一九〇六）

・明治三十八年十二月十日歸京、寓三田綱町一番地、歸朝雜詩。四首。三十九年四月作

日本・東京 七〇二〇

七〇二〇

②

・寄懷張公使

日本・東京 二一

二一

②

◎大正二年（一九一三）

・墨國有變 大統領擧族避難于我棧館、亂平後予將去墨國、示僚友

メキシコ 二二

二二

②

・大久保卜居偶得（五月）

日本・東京 二二

二二

②

・五年前自瑞典赴墨國偶得丁母喪、今茲歸朝恨然賦此

日本 二四

二四

②

・癸丑七月歸展先墓（七月）

日本・新潟 二六

二六

②

・京都圓山村井氏別邸長樂館偶得（八月一日）

日本・京都 二五

二五

②

・八月九日船發敦賀（八月九日）

日本・福井 二七

二七

②

・女花枝囊嫁秋山氏予之西航與、其夫相携送到敦賀賦此爲別（八月一日結婚）

日本・福井 二八

二八

②

・日本海偶占

日本 二九

二九

②

・哈爾賓

中国・哈爾賓 三〇

三〇

②

・西比利亞途中 二首

シベリア 三一・三二

三一・三二

②

・貝加爾湖

バイカル湖 三三

三三

②

- ・烏拉山頭
- ・莫斯科府 二首
- ・馬德里都雜詠

◎大正三年一月(一九一四)

- ・五十自述 大正三年一月廿八日作 時役于西班牙

◎大正四年秋(一九一五)

- ・秋妃 佛國俱爾蒙原作漢譯(フランス・グールモン)
- ・秋詞 佛詩俱爾蒙原作漢譯(フランス・グールモン)

◎大正六年(一九一七)

- ・大正六年九月廿六日、將發馬德里賦此留別

- ・西班牙途中矚目
- ・過塞維里亞

- ・船發加的斯至紐育

- ・杜海懷古

- ・宿廣路街十二層客棧

- ・登摩天樓

- ・汽車過落機山ロッキール山

- ・大平洋上迎天長佳節書感(十一月三日?)

◎大正七年(一九一八)

- ・大正七年一月大森望翠樓客棧迎年、次韻伊東君韻

- ・賦得海邊松用伊東君韻
- ・偶吟次酒井君戊午元旦韻(一月一日)

- ・與僚友騎馬遊習志野

- ・偶感

- ・荷風永井君辱惠先人 禾原先生來青閣集賦謝

- ・會津八朔郎兄 二首 (大正七年七月一日東京にての作)

- ・南平臺寓樓雜詩 二首 (大正七年一月)

- ・戊午八月廿三日赴長岡展先墓(大正七年八月廿三日)

外交官漢詩人 堀口九萬一の詩作年譜

| | | |
|----------|-------|---|
| ウラル山 | 三四 | ② |
| モスクワ | 三五・三六 | ② |
| マドリード | 三七 | ② |
| スペイン | 三八 | ⑧ |
| スペイン | 三九 | ⑩ |
| スペイン | 四〇 | ⑩ |
| スペイン | 四一 | ② |
| スペイン | 四二 | ② |
| シリア | 四三 | ② |
| { ニューヨーク | 四四 | ② |
| トラファルガル | 四五 | ⑦ |
| アメリカ | 四六 | ② |
| アメリカ | 四七 | ② |
| ロッキール山 | 四八 | ② |
| ロッキール山 | 四九 | ② |
| 日本・東京 | 五〇 | ② |
| 日本 | 五一 | ② |
| 日本 | 五二 | ② |
| 日本・千葉 | 五三 | ② |
| 日本 | 五四 | ② |
| 日本 | 五五 | ③ |
| 日本 | 五六・五七 | ② |
| 日本 | 五八・五九 | ② |
| 日本・新潟 | 六〇 | ② |

外交官漢詩人 堀口九萬一の詩作年譜

- ・題南平臺僑居壁 日本 六一
- ・拜伯國駐劄命書感、伯國世十三年前舊任地故及 二首 日本 六二・六三
- ・到新嘉坡 シンガポール 六四
- ・船着梨浦 四首 (十月三十日着) ブラジル 六五・六八
- ・書樓漫吟 ブラジル 六九
- ◎大正九年 (一九二〇)
 - ・伯國聖州日本移民地所見、大正九年八月視察旅中作 四首 ブラジル 七〇・七三
- ◎大正十年 (一九二一)
 - ・逸山原首相斃凶手、賦此致哀悼微意 三首 (十一月四日東京駅にて遭難) ブラジル 七四・七六
- ◎大正十一年 (九月、ブラジル・リオでの獨立百年記念祭に特派大使に任命、式典参加) (一九二二)
 - ・伯國百年祭日東名士觀光來臨、皆一國之選日伯國交更有可見欣然賦此 三首 ブラジル 七七・七九
- ◎大正十二年 (一九二三)
 - ・將去伯國得數絶 五首 (五月) ブラジル 八〇・八四
- ◎? (年代不詳)
 - ・人の嘲を解く ? 八五
 - ・新潟即事 (大河を前に) 二首 日本・新潟 八六・八七
 - ・芝城所見 (新発田で見たもの) 日本・新潟 八八
 - ・游十和田湖 三首 日本・秋田 八九・九一
- ◎大正十二年 (一九二三)
 - ・望翠樓寓居即事 十一月六日 日本・東京 九二
 - ・過改羅 (ルーマニア國赴任の途中) カイロ 九三
 - ・羅都賞蒞羅 (大正十三年?) ルーマニア 九四
- ◎大正十三年 (一九二四)
 - ・奉國書赴兪國所得 大正十三年五月十二日 ユーゴスラビア 九五
 - ・甲子五月廿七日余在羅馬尼、次女歸嫁羅國麻氏賦此記 ルーマニア 九六
- ◎大正十四年 (一九二五)
 - ・大正乙丑三月歸臥故山 書感 日本 九七

外交官漢詩人 堀口九萬一の詩作年譜

・船過布哇

一首

②

●「戊午詠草 其二」：第五號（大正七年九月発行） ☆詩題が異なるので示したが、詩数には加えない。

・余半生在海外。日親蟹行文字。而夙好所存。不能廢韻語。一日訪會津八朔兄、快談入夜。詩話俳談。歡興如湧。八朔兄囑木村正平。刻余印。因自號長城。字鵬鄉、昔人有句云。九萬里中銀自化。余名九萬一。圖南雄志。每來往於懷裏。偶得二絶、

※①五言絶句 三首。 ②七言絶句 二五首。 ③五言律詩 四首。 ④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩↓無し。

三 『游心録』『海外日記詩抄』による補足（七首）

◎明治三十六年（一九〇三）

・東京の親友への書翰の端へ 一首

②

・ペトロポリス紀事詩 五首の五

②

◎明治三十九年（一九〇六）

・歸朝雜詩 二首の二

②

◎大正七年十月三十日（一九一八）

・船著梨浦 五首の二

②

◎大正九年八月（一九二〇）

・伯國聖州日本移民地所見 六首の一・三・四

②

※②七言絶句 七首。①、③、⑩の詩型は無し。

四 『外交と文藝』による補足（四首）

◎明治二十八年九月（一八九五）

・李院君への贈詩：七言絶句四首（李院君との会話に代わる贈答詩。詩題は無し。うち一首は転結の二句のみ） ②

※②七言絶句 四首。

五 『堀口大学随想集』『詩と詩人』による補足（一首）

◎昭和二十三年「序に代うる書翰」佐藤春夫

・堀口九萬一からの贈詞一首

⑩

※⑩詞 一首。①～⑨の詩型は無し。

○

堀口九萬一の漢詩で、現在知り得るのは、一、『長城詩抄』九七首。二、『花月』三三首。三、『游心録』七首。四、『外交と文芸』四首。五、『詩と詩人』一首、であり、詩数は、一四一首、詩型は、①五言絶句 三首。②七言絶句 一二六首。③五言律詩 七首。④五言古詩? 二首。⑤七言古詩 一首。⑥詞 一首で、七言絶句が圧倒的に多い。なお⑦の五言古詩一首は、フランスの詩人、グールモンの詩を訳したもので、型式・内容から見て、詞の部類に入れるべきかも知れない。

(四天王寺大学客員教授)